

多文化・多言語社会のマイノリティ支援と 歴史的記憶の保全—— 震災現場における地域研究者の活動

上野 稔弘 地域研究コンソーシアム研究企画部会／東北大学東北アジア研究センター

第1セッションは、3月11日に起こった東日本大震災に関連して、震災現場における地域研究者の活動をテーマとした。セッション冒頭において上野によるセッションの趣旨説明が行われ、続いて地域研究コンソーシアム加盟組織の活動紹介として、長谷部美佳氏（東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター）、寺田勇文氏（上智大学アジア文化研究所）、平川新氏（東北大学東北アジア研究センター）、吉富志津代氏（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）の報告が行われた。

以下では各報告者の報告内容に触れつつ、本セッションの主要課題である地域研究の災害対応への貢献という問題にいかなる知見が与えられたのかについてまとめたい。

■ 多言語による情報提供活動と 移民コミュニティ支援

本セッションでは、まず地域研究者として被災者によるどのような支援が可能なのかという点で、いろいろと示唆に富む報告がなされた。長谷部報告では東京外大多言語・多文化教育研究センターのスタッフによる震災関連の多言語情報支援活動が取り上げられたが、今回の被災地に居住する外国籍の人数が意外と多く、また今回の活動で22言語を活用したという指摘はとても興味深い。

情報支援は現地の国際交流協会などからの要請を受けた情報の翻訳およびそのWebによる発信といったかたちをとったが、提供すべき情報が原発事故の影響もあって多岐にわたること、また状況の推移にともなって提供すべき情報も随時変化したこと、そのため翻訳に際しては迅速さと正確さが重要であり、作業の役割分担や第三者による校閲、正確な情報に絞った掲載方針を導入したという点は今後も参照すべき経験である。

寺田報告は、在日フィリピン人被災者への支援活動について、東京へ避難したフィリピン人被災者に対するカトリック教会を介しての支援や、被災地の教会を通じてのフィリピン人向け支援の状況を中心に紹介

した。そのなかで、これまでフィリピン人の神父・シスターがおらずタガログ語でのミサもなかった仙台教区に首都圏などからフィリピン人の神父や信徒が訪れることで被災地支援の枠組みが形成され、そのことで被災地のフィリピン人の間で在日フィリピン人意識が確認・強化・再認識されるプロセスが始まっている事例が紹介された。

吉富報告では、被災地における現地情報の多言語発信やコミュニティ・ラジオ局、移民コミュニティに対する活動について、阪神・淡路大震災の経験がどのように活かされているかといった点も踏まえて紹介された。

東日本大震災では、通信インフラが被災したことによる情報の途絶や、必要な即時的情報が届かずに却って不要不急な情報ばかり伝わるといった情報格差による情報源への信頼低下といった「情報災害」の側面が、今般の日本社会における情報化社会の深化や被災の甚大さもあって非常に顕著であった。とくに被災地に住む外国籍および外国出身者にとって状況はより深刻であった。その点で地域研究者およびその組織が持つ外国語の翻訳・通訳スキルは有用であると言える。

■ 資史料の救出と電子化で 地域の歴史的記憶を掘り起こし、守る

また、「情報災害」には、地域に残されていた古文書などが被災により散逸したり瓦礫とともに処分されたりすることで地域の歴史的記憶が失われるという側面もある。

平川報告は今回の震災を受けての被災地での古文書救出作業を紹介したものである。個人宅が所蔵している古文書の重要性が指摘されるとともに、被災した資料の救出作業の膨大さが説明された。歴史的記憶を救出するという点においても地域研究者のスキルが求められる。

■ マイノリティの存在を社会に浸透させて より民主的な社会の構築を支援する

第1セッションでは、災害時における外国出身者な

どのマイノリティへのきめ細かい情報提供という点で地域研究者が活躍できる側面が多いことが示されると同時に、被災地ではこうしたマイノリティを包摂した社会の構築が必ずしもうまくいっておらず、それが今回の震災を通じて顕在化したことも指摘された。

たとえば寺田報告および質疑応答において、近隣に教会がないという被災地の状況や日本の教会に残る西欧優先的な雰囲気震災以前にフィリピン人信徒が教会に行かない一因となっていたことが指摘された。これに関して寺田氏は、日本の社会に向けてフィリピンの人びとが日本に在住する社会的背景や彼らの心情を理解してもらうよう尽力することが地域研究者として重要であると強調する。

この点については、吉富・長谷部両氏も、住民さらには日本人全体が自身の社会を考える際に多文化や多言語の視点を取り入れ、多文化社会としての日本のありようや外国の人びとが日本に住んでいることの意味を考えながら、より民主的で成熟した社会を構築する必要性を主張する。地域研究者はそれを気づかせて促し、支援する役割を担っているとも言えよう。

■ 息の長い活動を通じて信頼を獲得し 活動経験を蓄積する必要性

また、こうした活動は一朝一夕に達成できるものでもない。吉富氏が指摘するように、被災地支援を通じて地域社会が直ちに大きく変化するというわけではなく、小さな変化を積み重ねるプロセスを通じてより長い時間的スパンで見る必要がある。

また、平川氏が指摘するように、地域研究者の活動は現地の人びとの理解と協力が必要であり、そのためには時間をかけて信頼を得る方法を考え、活動経験を蓄積することが必要になる。こうした地道で息の長い活動が地域研究者に求められているとも言えよう。